

グループの「構成」と「構造」

—エンカウンターグループとサイコドラマの対話—

野島 一彦
跡見学園女子大学

下田 節夫
神奈川大学

高良 聖
明治大学

高橋 紀子
甲子園大学

1. はじめに

どのようなグループ・アプローチにおいても、グループをどう構成するかは、非常に大切な問題である。誰が(スタッフ)、どのような人たちを対象にして(メンバー・クライアント)、どこで(場所)、いつ(時間・スケジュール)、何を目指して(目的)、どのような方法で(技法・態度)その活動を行うのかなどについて、どう考え、組み立て、呼びかけるのか。いわば、グループがその中で行われる「器」をどう作るか。これによって、グループのプロセスがほとんど決定的ともいえる影響を受ける。

もちろん、グループの進行にスタッフ(ファシリテーター、リーダー、治療者)がどうかかわってゆくのが重要であることはいうまでもないが、その進め方の大本にある、スタッフの考え方や姿勢は、既に「構造」をどのように「構成」するか、というところに、端的に表れると言ってよいだろう。

本稿は、2013年7月14日に跡見学園女子大学文京キャンパスで開催された<グループ研究会>主催の「グループの『構成』とその『構造』について考え・語り合う会」の記録をまとめたものである。

この会は三部構成で行われた。第一部では、1982年に執筆された「エンカウンター

グループ構成論」を元に野島がグループ構成論について話をし、続いて下田が1988年の「エンカウンターグループの『構造』について：『リーダーシップの分散』の実現を支えるもの」等を踏まえグループ構造論を話した。

続く第二部では、高良が第一部の話を受けてサイコドラマの立場からコメントをし、3人で対話を行った。

そして第三部では、参加者全員で、それぞれに思ったことを出し合って、テーマを展開した。

本稿では、その第二部を中心に紹介することとする。

2. サイコドラマとエンカウンターグループのグループ観の違い

●高良 私は獨協医科大学病院精神神経科に15年ぐらい、臨床心理士として仕事をしていました。現在も精神科のクリニックと精神科病院で、教員の仕事と並行して臨床の仕事をしていますけど、そこはもう明確に医療臨床です。グループは毎週1回火曜日に、デイケアプログラムの中に集団精神療法という形で1時間、6月にスタートして、来年3月までの契約で、言語によるクローズドグループを行っています。それとは別に月に1回、明治大学心理臨床センターで、サイコドラマを行っています。エ

ンカウンター・グループは、上智大学の小林純一先生が御存命のときにグループに参加して、私なりに宿泊研修体験をしました。

私のバックグラウンドは医療、病院臨床なので、グループに対する考え方が違うなというのが1つあります。グループに対する考え方というか、それはロジャーズの考え方との違いと言ってもいいと思います。もちろん、私たちも来談者中心療法を基本的に使っているので、ロジャーズは取り入れますけど。例えば、グループは自己成長するという前提がありますよね。その点で、下田先生が「いざとなったとき、プロセスを知り、グループを信じる」とおっしゃるのはわかります。それは、グループが何とかしてくれるだろうという考えですけど、一方で、医療現場では、明確にリーダーとしては、ある程度グループに介入していかないと、收拾がつかなくなってしまう。そこではあくまでもセラピーという前提があるので、グループの自己成長には依存しません。

本当に究極的に言えば、私はグループは1つの道具だと考えています。これはもちろん、押しつけるつもりは全然ないです。グループは個人のための道具だということです。個人療法での1対1の面談だけでなく、クライアントをグループにぼんと置いたときに、いろんな自分が出るわけです。そのときに適切なタイミングで気づかせる。これは私のやり方であって、ほかのグループセラピストがみんなそうだというわけではありません。コミュニティーミーティング、SST(ソーシャル・スキルズ・トレーニング)というのものもあるし、最近

は、リワークグループといった認知行動療法からのアプローチが医療領域では盛んになっていますが、私が意図して行っているのは「気づき」ですね。そのうえで、対人関係の練習をしようという形で行っていません。

このように私はグループアプローチを道具だと思っています。それ以上のものでも以下でもない。グループセラピストと我々は呼ばれ、ファシリテーターと呼ばれることはない。そこは明確にセラピストです。したがって、セラピストは何をする人かという、テクニックを駆使する人です。だから、関心があるのはテクニックであって、グループではありません。

グループの構造についてはバウンダリーという考え方があります。治療構造ですね。例えば、何時に始まって、何時に終わる。あと10回やりましょうとかという枠のことです。枠がある方が私たちは安心です。枠はどんな形であっても安心を与えるものであると知っておけばいい。

ところで、グループ過程においてどこにポイントを置くかと言ったときに、野島先生や下田先生が、グループの構造で一番最初が重要という話をされましたが、これは初期不安への対応という問題ですね。グループは、とにかく一番最初に集まったとき、絶対怖いんです。怖くない人はいない。つまり、何か知らないけど緊張するし、自分は仲間外れにされないかと思ってしまいうし、あるいは、リーダーは私のこと食べないかしらと妄想します。そういった不安は当然なのです。

その初期不安に対して、私たちセラピストは、どのように個人が自分の初期不安に

立ち向かうかというところを自己洞察のチャンスにします。ある人は沈黙する。ある人はしゃべる。ある人は先生の顔をうかがう。ある人は、何か周りをうかがう感じで、じっとしてる。私は初期不安の沈黙のパターンは幾つかあって、私の中では沈黙が出たときの解釈は、まず、退却する沈黙、それから拒絶の沈黙、そして内省の沈黙です。拒絶しているのであれば、これはまずいわけです、その拒絶がずっと続くと。内省しているのであれば、余計なことは言わないでそのままにしておく。退却であれば、退却の意味を問うこともあります。

例えば、しばしば沈黙が続くことがあります。10分、15分と、もし続いたら、さらにこれ以上沈黙が続くと思ったら、「今、この沈黙に、何が皆さん起こってますか？」とセラピストは介入します。これ以上沈黙が続くと、グループにとっていいことがないと判断した段階で介入します。

その介入の方法にもテクニックがあります。例えば、個人に向かうよりも、グループの真ん中にぼんと石を投げる感じですね。セラピストはグループに向かって語りかけます。初期の頃は、メンバーに向かって語るのではなく、グループに向かって語ることを意識します。ただし、セッションが進んできて、後半になったら個人に対して、「どんなことに気づきましたか？」とか、あるいは、「何を得ましたか？」とかの質問で介入します。

●高橋 グループを道具だと思ってる高良先生から、野島先生や下田先生のグループの話をお聴くと、2人はグループを何だと思ってる感じがしますか。

●高良 少なくとも、私よりはグループを愛してるんだな、と(笑)。何か愛が伝わってくるから、思い入れを感じますよね。だから、すごいなと思ってました。私はそれよりも、グループを技術として使わない手はないと思ってる。グループの持つてる力を利用しない手はないなと、その1点なんです。その意味では魅力的。

だから、私もグループを好きだとは思ってますけど、ただ、私はやっぱり基本的に自閉的なんです。グループの中でどう自閉的でいられるかというのを目指したいと思ってるから、究極の目的は、グループの中にいて、個でいられることだと考えています。みんな何か、いろんな他人の目を意識していて、グループの目的が何かあるかのようで、そんなグループを苦手だと思うのだろうけど、もし、グループの中で自分らしく、本当にわがままでいられたら、こんな楽なことはないでしょう。そういう個を目指してるという意味で、治療の道具箱の1つとしてグループを使ってるという、そんな感覚ですかね。

3. ファシリテーターの努力とセンス

●高良 野島先生は「ファシリテーターに学位は関係ない」とおっしゃっていましたが、知識ではないと言ったときに、グループリーダーとか、グループセラピストとは何者なんでしょうか。

かつて明治大学で集団精神療学会を主催したときのテーマが「努力はセンスを越えられるか？」でした。どうしようもないやつ、いるじゃないですか。要するに、グループリーダーとして難しい人。それは、実は個人療法家としても難しい人ですね

ど。グループリーダーってつらい。なぜかという、その力がすぐ他人にわかってしまうからです。個人療法は、密室の中で行ってるわけだから、どんなセラピーをやってるかというのは、はっきり言って、誰も知らない。だけど、グループリーダーは、そこに出れば、どんなやり方かわかるし、例えば、野島先生のグループに出れば、野島先生ってこんなやり方なんだとか、こういう人なんだというのが、もう筒抜け。どんなきれいごとを言っても、実際にできるかできないかが他人にわかってしまうというのは怖いですよ。

そこで、センスとは何かという問題が出る。もちろん、努力とセンスは両方必要だと思うし、私は努力で何とかなる部分はあると思っていますけど。先生たちの考えるファシリテーターのセンスみたいなものが、もしあったら、ディスカッションしたいなと思いました。

●野島 グループのファシリテーターを含めて、個人の心理臨床もそうですけども、「専門性」と「人間性」が必要だという言い方をすることがあります。専門性というのは知識、技術です。人間性というのは、ある意味で、今、おっしゃったセンスなりが入ります。知識、技術と人間性の比率は3対7という言われ方もあります。知識、技術が占める割合は30%、人間性が70%。

●高良 そんなに多いんですか、人間性が。

●野島 ええ、人間性のファクターが大きいということなんです。知識や技術は、授業に出て、いろいろ学習したりすることで獲得することができる可能性がありますし、努力が報われる世界だと思います。た

だ、人間性の中の、特にセンスと言われると、これはセンスティビティートレーニングというのが世の中にありますから、センスをトレーニングすることはできるという考え方もあるんですけども、センスと一口に言っても、中身はいろんなものが含まれるように思います。

私が、特にエンカウンター・グループのファシリテーターとしてセンスがあると思ってる場合のセンスの中身は何かというと、1つ目は、これは何とも言いがたいけど、一日会って、あるいは、数分間過ごしたときに、安心感・安全感を与えてくれるかどうかです。ある人とは、3分間一緒にいたら、何か窮屈になったり、気が重くなったりしますし、ある人とは、言葉を交わさなくても3分間一緒にいると、何か私の心が次第に解けていく感じがします。そういう意味で、ともにいて安心感・安全感をこちらに与えるという資質を持つてる人はセンスがあると思います。

2つ目は、やっぱりエンカウンター・グループは主に言語コミュニケーションを中心に行いますから、やはり自分の体験を自分の言葉で語ることができる、あるいは人の体験を自分の言葉で表現できるという言語化能力もセンスの1つだと思います。高良先生はサイコドラマをずっとやっておられて、サイコドラマでは、言語だけじゃなくて、アクションもかなりありますでしょうけど、エンカウンター・グループは、どっちかというと言語が中心になりますので、やっぱり言語化する能力ですね。この言語化する能力というのは表現力ということだと思います。自分のことについて、また人のことをどのように理解したかという

ことを発信する能力です。

3つ目には、言語的表現能力とともに受信力が必要だと思います。アンテナですね。私は、いつも学部の授業等と言う話ですけど、コミュニケーションチャンネルは、バーバルとボーカルとノンバーバルの3つがある。バーバルというのは言葉ですね。Eメールでのやりとりがバーバルだけです。電話でのやりとりは、バーバルとボーカルですね。対面は、バーバルとボーカルとノンバーバルですね。受信力と言う場合には、相手のバーバル、ボーカル、ノンバーバルの3チャンネルを全てキャッチして、総合的に相手が何をこちらに発しているかを受信するということです。

●高良 人間性が7ということ、例えば、この人はグループリーダー、ファシリテーターに向かないと判断したときには、ほかに行ってもらうわけですか？あるいは、その人間性についても、何かそういう訓練みたいなことというのは。

●野島 そうですね。まず、自分がオーガナイザーの場合はもう、そういう人は絶対頼まないですよ。

●高良 そうですか。

●野島 はい、やっぱり頼まないし、頼めないし、メンバーを守るということを考えないといけないので。ただ、その方がメンバーとして入ることについては、大体受け入れます。

●高良 下田先生はどう思われますか。

●下田 今、困ってるんですよ。何かもっともらしいことを言うのも変だしと思って。参ったな。

●高良 先生はセンスありますか？

●下田 人との比較はわからないけど、自

分のそれでやるしかないなと思ってますけどね。あるかどうかは、それは人が判断することじゃないかな。これちょっと、また自分の宣伝になるかもしれないけど、僕は自分の体験を言語化することは、よくやってるなと思います。僕は、どうも言葉にすることは好きでやってるなと思う。

グループでも記録は毎回とりますね。記録とらないと、次のセッションへ行けないんです。だから、そこで起きたことを、とにかく書く。とにかく心の中に落ち着ける。一旦、こういうことらしいというのを落ち着けないと、次に行けないんです。2セッション経っちゃうと、もう頭がパンクしちゃいますから、セッションごとに記録をつけています。

●高良 それを努力と言っていいのかどうかかわからないんですけど、先生のやり方なんですよね。

●下田 それは、そうしないとだめなんです。

●高橋 高良先生がおっしゃるテクニックというのは、努力とセンス両方入ってる気がするんですけども、そこら辺も少し詳しく教えていただけますか。

●高良 私もどこまでのテクニックがセンスなのか、わからないですけど。基本的に、テクニックを学ぶのは知識だとか、あるいは事例検討会だと思う。もし、センスを学んだったらメンバー体験、これは不可欠だと思っています。ですから、センスを学びたいんだったら、グループメンバーになれ。それが嫌だったら、ほかに幾らでも楽しい治療法があるんだし、無理することないというのは伝えてますね。

そういう意味では、事例検討が、テクニ

ックの勉強の場だと思うけど、野島先生が言った人間性という意味では、メンバー体験は不可欠と考えています。

●野島 私もそう思いますね。メンバー体験が原点だし。それからもっと言うと、ファシリテーターやるより、メンバー体験が楽しいですよ。

3. 個人臨床とグループ臨床

●高良 大学院の教育にしても基本が個人じゃないですか。私たちもちろん、学生には個人療法をまずやらしてもらわなくちゃいけないし、言語が基本だというのは十分わかってるんですけど。グループアプローチの授業では、堂々と「僕は集団嫌いです」とか、何か自慢してる、集団が苦手だということを。恐らく心理学を志向する段階で、我々も含めて自閉が得意なはずなんです。カラオケ嫌いとか言うでしょう、みんな。それはいいですけど。だけど、私は、苦手と言うのは10年早いと思ってるんです。全てテクニクなのだから。だから、これは冷たい言い方かもしれないけど、まずはとにかくテクニクを学んでほしい。なぜかという、今、本当に1対1だけの対応じゃなくて、施設によってはグループを任されるという仕事上の事情、就職先の事情が出てきています。また、精神科デイケア、あるいは、学校、学級も含めて実のところグループです。そのときは仕事としてやらざるを得ないわけだから、そのためのテクニクと言うことです。結構、普通にグループは苦手と言わないですか、最近の学生って。というか、昔からそうかな・・・。

●野島 カウンセラーとか心理臨床家を目

指す人は、グループが苦手という方が大体多数派だと思います。1対1の個人カウンセリングは二者関係ですよ。人間の発達から考えても、二者関係から三者以上関係へと上がっていくわけだから、心理臨床家を目指す人は、社会的な成熟度がやや低いのだと思います。成熟度がかなり高い人は、こんな心理療法とかカウンセリングに関心を持たずに、もうちょっと実学の世界、経済とか政治に行くと思います。

●高良 かつて明治大学では、3年生になってから、心理系と社会系とに分かれていたですよ。そうすると、健康度の高い元気な男子は、みんな社会系へ行っちゃう(笑)。それがいいか悪いかは別問題として。

●下田 ちょっと僕に引きつけて言うと、さっきもお話しした大学院での授業、グループでやるでしょう。終わったところで、みんなに感想を言ってもらったんです。そしたら、3分の1ぐらい、あるいは、もっと多くの人が、「私はグループで話すのは苦手だと思ってました」と言いました。「でも、ここではしゃべれました」とも言っていました。

●高良 そうすると、何か本当はしゃべりを求めている。本当は語りたいという感覚というのはありますよね。20年前、30年前に先生たちの書いたその時点で、この論文は本当にすごいと思ったんですけど、この方法というのは、例えば、今の若者たちにも適用できると考えるのか、あるいは、当時の考えをやり方として今はこういうところは変えた方がいいと考えるのか教えていただきたいです。

というのは、最近「触れ合い恐怖」と

いう、聞いたことがある方もいると思うんですけど、1次会は行けるけど、2次会が怖くて行けないという若者たちのことです。普通の挨拶とかはできるけど、ちょっと親しくなる、つまりインフォーマルに近づくと、それが怖いという特徴です。だから、対人恐怖とは違います。何とか話せるし、友達いるんだけど、深い関係になりたくない。つまり、飲み仲間にはなれないというようなのが増えているという最近の若者の気質、大学生ですね。そういった傾向を考えたとき、このエンカウンターのようなものは、彼らにとって難しくなってくることはないだろうか。あるいは、そんなことはなく、本質的には変わらないのかというようなことを聞きたいと思ったんですけど。

●野島 私がグループ構成論を書いたのは30年前ですよ。30年前の状態と、次第に10年単位くらいで見ると、やっぱり学生のメンタリティーが変わってきていると思います。というのは、ある看護学校で毎年、3泊4日ぐらいのグループを20年以上、毎年続けてきました。最初は3泊4日で、非構成でちゃんとグループが成り立ったんですね。けども、15年、20年たったら、教務課の先生がやってきて、「野島先生、もううちの最近の学生は、非構成には耐えられません。だから、非構成でなくて、構成的なグループをやってください。それから、4日間にも耐えられません。合宿で4日間もみんなと一緒にいるというのはつらい。だから、1日減らして2泊3日にしてください」と頼まれるということが起こってきました。これは学生のグループに対する、ある意味でのトレランスが低く

なってきたらと思いますね。

しかし、私は構成的なグループもやるんですけど、本当はああいうのは好きじゃないです。そこで、このベーシック・エンカウンター・グループの非構成のタイプと、國分先生的なものを少しジョイントする形でということで、半構成的、セミ・ストラクチャード・エンカウンター・グループという形をとらざるを得なくなったんです。そして、セミ・ストラクチャードをとると、何とか学生もついてこられるという感じですよ。

この春学期、私はこの跡見の学部の授業で、実はエンカウンター・グループやっているとですね。最初はセミ・ストラクチャードでテーマがあります。「私の進路をめぐる過去・現在・未来」とか、「家族」とか、「私のキーワード」とか。そして、ここ数セッションは、「今、ここで話したいこと、話せること」というテーマなんです。今、ここで話したいこと、話せることというテーマは、非構成そのものなんですよ。だから、構成の形をとりながら、非構成をと。

●高良 ある意味では本当にテクニック、センスが求められますね。

●野島 そう、テクニック、センスが求められます。

●高良 非構成にしておいて、徐々に自己表現できるようにする。私は学生に対するエンカウンターというものはやってないものですから、最近の若者という意味では聞いてみたいと思った次第ですよ。

4. グループに向くか向かないか

●高良 あと、私は、グループに向くか向

かないかの基準は、病気じゃないと感じるときがあるんです。統合失調症者でも向いてる人がいるし、健常者でも絶対向かない人もいます。その辺のグループ選択の問題というか。エンカウンター・グループの場合は来るもの拒まずということで、ここは多分ずれてしまうのが十分わかってるんですけど、どうしてもセラピーでグループを使う場合は、ある程度目的を持って、そこに到達しなくちゃいけないものだから、誰に対して適切な方法なのかという適応の問題には神経質になります。

その辺で先生たちの、例えば、同じ学生でも向いてる学生がいるとか、あるいは、やっぱり向かないのか。それとも、エンカウンターはそれをも包含して成長できるという潜在力があるのかというようなことはどうですか？

●野島 向く、向かないという話で、統合失調症者のことも出ましたが、私は病院臨床で25年間ずっと毎週グループをやってきました。そのグループには、20年以上参加している人もいました。統合失調症者のグループが25年も続くということは、統合失調症者全てではありませんけど、統合失調症者には、グループに向く人が結構いるということだと思います。

●高良 そうですね。

●野島 私の統合失調症者のグループの位置づけは、「社会的な居間」と考えていました。つまり、1週間の生活の中で集まってきて、「社会的な居間」で、みんなでいろいろと暮らしぶりを話して、また、次の1週間がまたやってきてということですから、グループで何か深い意味での自己洞察とか、そういうことはほとんど狙わ

なくて、極端に言うと、1週間、1週間、何とか入院せずに生き続けていくということができるといことが大事だと思っていて、そのために、「社会的な居間」があるということは、それをサポートするということになっていたと思います。

それから、人間はグループが好きな人と嫌いな人がいると私は思います。それでいいと私は思います。グループについてどうしてそういう形で分かれるかという、これは、ある精神科の有名な先生が、「人間にとってグループは必要悪、つまり必要ではあるけれども悪である」とおっしゃっていたことと関係があると思います。

グループには二面性があると私は思っています。うまく機能すると人を生かし育てますが、悪く働くと集団いじめのようになり人を自殺に追い込む力があるんですね。私はグループというのは、エンカウンター・グループも含めて、そういう人を自殺に至らしめるくらいの力を潜在的には持っていると思っています。そういう意味で、エンカウンター・グループは、いつも安全できちんとやれるというわけにはいなくて、下手すると、人を自殺させるくらいのグ絶大なパワーがあると思っています。

最近の若い世代はいじめ世代ですから、いじめられ体験とか、集団のそういうのを体験してる人は、グループは怖い、グループには近づかないということになってるように思います。

●高良 と考えると、グループを志向する臨床家は、ますます少なくなってくるんですかね。

●野島 そうですね、少なく、余り多くな

いですね。

●高良 これは逆に狙い目ですね。よく心理士の就職試験で面接のときに、私、グループ好きですと言えば受かるから、高良の授業をとったときは、そういう宣伝をしろと言ってるんです(笑)。なぜなら、みんなやらないから。

5. ファシリテーターのメンバー化について

●高良 下田先生に聞いたかったのですが、リーダーがメンバーと一緒にいるという考え方も十分わかるんですけど、ただ、私は、基本的にリーダーというか、ファシリテーターも含めて、メンバーには絶対になり得ないと考えています。どんなに我々がメンバー化しようとしても、それはもう、ファシリテーターだから困難です。もっと言えば、本当に俗っぽい言い方をすれば、お金をもらってるか、もらってないかで分けてるんです、私は。だから、本当に現実的ですけど、そのセッションでお金をもらうのか、お金を払うのかという事実がある限り、その2つの立場が一緒になるということはありません。グループの中ではそれをどのように意識するわけですか？リーダーもメンバー化するというところで。

●下田 僕はリーダーがメンバー化すること余り…。

●高良 対等性。

●下田 つまり、人間としては対等、でも私はあくまでスタッフ。

●高良 人間として対等性とおっしゃった。

●下田 はい。スタッフ性を背負ってる人

とそうじゃない人は違う。いろんな人がいろんな問題を背負ってるように、僕がスタッフ性を背負ってるという点では、ほかの人と違うとは思わないけど、背負ってる内容が違う。

●高良 つまり、スタッフ性というテーマを背負ってるという意味で。

●下田 そうです、そうです。だから、メンバーになろうとは別に思わない、というか、そんなこと考えてる暇ないですよ。人のことをいっぱい考えるから。だけど、何かのときに、自分のことをいっぱいしゃべることは、たまにあります。でも、それはメンバー化しようという意識ではない。ただ流れの中で、しゃべろうと思ったり、しゃべりたくなったりする。その結果、ほかの人と一緒にになったらなかった、ならなかったらならなかった、ということだと思います。

●高良 私は、自己開示、グループセラピーで言語的分析的な志向なんだけど、自己開示するときは治療効率を意識して、ここで自己開示して進めるぞという、本当に嫌らしい話ですが、テクニックとして使っちゃうんです。もちろん、湧いてくるんだけど、湧いてきたときに、ポンと言うときに、これを言ったほうが先に進めるとか、あるいは、言ったら、私の方がパワーを持っていて、否が応でも、リーダーだから強いので、あえてちょっと引くとかいう意識はをするという感覚があるんです。

●下田 私の場合、自分のほうがしゃべって、ほとんどないんです。でも、どうしてもと思ったときは言うけど、でも、それはスタッフという意識でやることであるとは思ってないです。

●高良 ファシリテーターに依っては、自由に自分のテーマも語って進めるという人もいるということはないですか？

●野島 リーダー、ファシリテーターと言うと、人を指しますよね。ただ私は、ファシリテーターには、「ファシリテーター性」と「メンバー性」という2つの機能があると思います。またメンバーはファシリテーターではないけども、「メンバー性」と「ファシリテーター性」というを2つの機能を持っていると思います。

「ファシリテーター性」と「メンバー性」をお互いに持ってますから、ある局面では、ファシリテーターのメンバー化ということで、ファシリテーターが「メンバー性」を発揮する場面があるし、別の場面では、メンバーのファシリテーター化ということで、メンバーの「ファシリテーター性」が出てくるということがあります。人というよりは機能として、「ファシリテーター性」、「メンバー性」という2つの機能をみんなが持っていると考えるほうがいいかと思います。

●高良 わかりやすいですね、確かに。

●野島 それと似たようなこと、「母性性」と「父性性」だってそうですよね。お母さんは「母性性」だけで、「父性性」がゼロとかいうことないし、お父さんだって、「父性性」だけで「母性性」がゼロということではないですよ。また、アニメとアニメスの話もありますよね。1人の中に「男性性」、「女性性」、それから、「父性性」、「母性性」があるように、「メンバー性」と「ファシリテーター性」、そういう両方があり得るんじゃないでしょうかね。

6. パワーの一番少ない人がいられるグループ

●高良 あと、下田先生が「パワーの一番少ない人」とおっしゃったこの言葉が気に入ったんですけど、パワーの一番少ない人に合わせるとか、少ない人がいられるグループってというのは何かすごくよくわかる。そのパワーというのはその人にとってどういうことなのか、もうちょっと聞きたいなと思いました。そういわれるグループを目指したいとおっしゃったと思いますけど。

●下田 例えば、自分はここにいていいんだろうかとか、大丈夫だろうかとか、何か脅かされている感じとか、何か怖いなとか、そういうのがあるときは、パワーが弱いんだと。余りそういう心配をしないときは、パワーが強んじゃないでしょうか。

●高良 それは、ファシリテーターをやっているながら、グループの中で見ていったということですか？

●下田 いつもそういうことには目を向けているんじゃないですか。だから、同じ人でも、あるテーマになったらパワーレスになっちゃうこともあるし、そういうことには気を配っている気はします。

●野島 私は、パワーという言葉は使わないんですけど、似たようなことだと、その人のグループにおける居心地のよさということは何となくすごく気にしますね。

●高良 居心地。

●野島 ええ。10人メンバーがいたとして、皆、居心地よくここにいるだろうか、どうだろうかというのを気にするし、時々、「居心地はどうですか」と聞きます。そして、居心地が一番悪い人を、落ち

穂拾いのようにして、何とか最低限拾っていくということを心がけることをしています。

グループのイメージとして私は、競馬のイメージがあります。競馬は10頭ぐらいで、先行馬がいて後行馬がいて、走ってますでしょう。一番後行馬の人が、私が居心地がいいかどうかということで気にしてる人です。この人をこの競馬集団から脱落させずに何とかついてきてもらおうということに気を使いますね。

●高良 なるほどね、今ので連想を得たのは、セッションが終わってから1時間程度看護師、ソーシャルワーカーらと一緒にスタッフミーティングをするんですけど、そのときに、メンバーでもスルーしちゃう人、つまり、思い出せない人がいたりする。「ロストワン」と言いますが、とにかく、いるけどいないという存在の人のことです。ついつい、我々もスルーしちゃうというときに、もしかしたら、その存在というのが下田先生の言うパワーかなと。何

か、忘れてしまう。いつもというわけじゃないですが、でも、逆にそれで他人に意識させるといふこともあると思う。いない子のように振る舞うということ。

●野島 そうすると、それからの連想ですけど、ロストワンと、パワーと、それから下田先生がロジャーズを引用しておっしゃるプレゼンスといったことから考えると、パワーレスということ、プレゼンス感のパワー、プレゼンスパワーが低いということじゃないでしょうかね。

文献

野島一彦(1982). エンカウンターグループ構成論. 福岡大学人文論叢, 第14巻第1号, pp. 1-32.

下田節夫(1988). エンカウンターグループの「構造」について: 『リーダーシップの分散』の実現を支えるもの. 神奈川大学心理・教育論集, 第6号, pp. 46-64.